

- ▼ 『東方』309号より
- 一 中国にとって近代とはどういう時代だったのか
- ▲ 高田 幸男

『東方』三〇九号より

中国にとって近代とは どういう時代だったのか

高田 幸男(明治大学)

著者宮田道昭さんは評者にとって大先輩であり、その宮田さんがまとめられた本を評することは、評者が経済史に疎いこともあって、いささか荷が重いことである。ただ、本書は論旨明確で、「門外漢」の評者でもすんなりと読むことができた。そこで社会経済史的視点からの本格的な書評は他に譲るとして、二十世紀の江南地域社会史を研究する評者の視点から蛮勇をふるって評することにした。本書は、著者の二十五年間の研究を集大成したものである。章立ては以下のようになっている。

- 序論 中国の開港と沿海市場
- 第一章 開港後における外国貿易品流通機構の一考察
 - ギルドの流通支配を中心として
- 第二章 十九世紀後半期、中国沿岸部の市場構造
 - 「半植民地化」に関する一視点
- 第三章 広東省潮州地方における砂糖貿易の展開と地域社会
 - 汕頭港の流通状況を中心として
- 第四章 十九世紀中葉、上海における豆規銀本位制の成立
 - について——中国在来の地域的通貨金融機構の一考察
- 付篇 もう一つの上海案内——魔都・上海戦・豫園

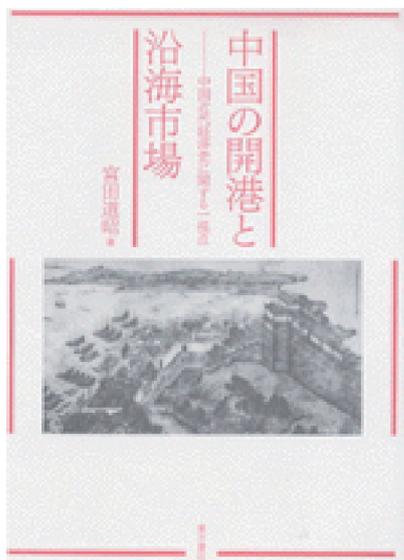
▶ トップページにもどる

宮田道昭著

『中国の開港と沿海市場』

——中国近代経済史に関する一視点

A5判・二三四頁・東方書店・三、三六〇円



いずれの章も既発表論文をベースとしているが、著者の現在の視点に従い、それぞれ修正・加筆されている。とくに本書の全体構成を展望する序論は一九九一年、雑誌『思想』に発表された論文をベースとしているが、「アジア交易圏」論批判を意図した旧稿を大幅に書き直し、「沿海市場」の自説を前面に出したと、著者は説明している(はしがき)。

そこで序論を少し詳しく紹介すると、まず冒頭で一八五二年のいわゆる「ミッチェル報告書」を引用し、ヨーロッパ経済の外側に「屹立して、それ自身が中心の一つの世界市場、世界経済」(一二頁)として中国沿海地域の経済圏(本書では以下「沿海市場」とよぶ)の存在を指摘する。当時の中国市場は、こうした広域市場の複合体であり、その広域市場の一つとして沿海市場が存在していた。それは、奢侈品的性格が強く不安定なアジア諸地域間のシナ海貿易

に比べると地味ながら、大衆の日常生活に密着した沿海貿易によるもので、十八世紀後半から開港にいたる時期に、東北から広東にいたる巨大な沿海市場が生まれていったとする。ミツチエルが「実感」したのはこうした沿海市場のシステムの障壁であった。

本書は、この沿海市場が開港によってどのように変遷し、解体していったのかを考察する。というところ、教科書的「帝國主義侵華史」を思い浮かべがちであるが、一方的に解体されていくのではなく、しなやかに対応・対抗し、初期にはむしろ貿易を主導した在来システムの姿を浮きぼりにしていく。中国では十八世紀後半までに、沿海貿易によって東北・山東の大豆・豆餅(豆粕)、江南の綿花、福建・広東の砂糖という地域間分業ができあがり、これに応じて各地の作物栽培も特化していた。そこで著者は、以下の各章において、それぞれの商品流通の開港後について、おもに海関報告にもとづいて考察する。

そして、沿海市場は開港後も構造を改変することなく、各種ギルドが過剰貿易の外国人に対して優位に立ち、外国船舶の出現による「交通革命」などの利益も抽出していたこと(第一、二章)、砂糖の産地潮州では、「交通革命」により東北地方との直接貿易が増え人々の富裕化がおこっているが、日清戦争後の流通構造の変化で砂糖生産が後退したこと(第三章)、江浙地方では開港以前から流通していたスペインドルが「銀貴」によって消滅し、豆規銀を通貨単位とする銭荘手形が創出されたが、それは銭荘が相互に信用を保証する最大限合理的なシステムであったこと(第四章)など興味深い事実を明らかにしていく。付篇は、ガイドブックなどで「添え物」のように扱われている豫園を中心とする老城隍廟地区こそが、上海を築いた各種ギルド

▶ トップページにもどる

の拠点であり、開港後、さらに民国期にいたっても上海の一方の中心であったことを強調する。

近代を不平等条約に代表される列強の侵略の深化と、それに対する民族革命の過程ととらえると、外国資本・商人の優位性を前提として描きがちであり、さらにその侵略性と中国側の被害の大きさを強調するあまり、結果的に中国側の受動性、ひいては停滞性を印象づけることになりかねない。またその後の革命の「成功」を強調すると、やはりその分革命以前の近代は暗黒として描くことになる。著者も指摘するように(七七頁)、革命が自己を「反帝國主義反封建闘争」と規定していく中で、近代は遡及して暗黒の「半植民地半封建社会」と規定されたのである。では、侵略と革命とを対置させ、現代と近代を対置させる二項対立の構図をいかに打破し、近代をどのような時代として提示するか。

著者は、いわゆる「半植民地化」過程とは「資本主義の侵略と、それに対する中国側の抵抗との力関係の過程」であり「決して前者の一方的な過程、あるいは中国の受動的な過程はあり得ない」(七七頁)とする。そこで著者が提起したのが、商品流通と沿海市場という視点である。そこでは外国商人とともに中国の商人や農民も主体的に利益を追求し、開港や「交通革命」から利益を獲得しようとするアクターとして描かれ、近代産業の展開も中国の在来諸産業を含む在来の市場構造とその変化の中で考察される。従来このような見方が弱かったのは、流通より生産を重視するマルクス主義の影響に加え、商業を軽視する儒教的価値観が影響しているかもしれない。

商品流通と沿海市場という視点から浮かび上がってくるのは、否応なく突きつけられた開港という事態の下、流通

過程で展開される中国商人と外国商人とのつばぜり合いであり、結局は解体されていくにしても存続・変革を模索する在来システムのエネルギーである。それは知識人主導の民族運動・革命闘争とは別の次元の、人々の日常的営為における生きるための闘いであるが、改革開放政策下の「中国型資本主義」と底流でつながっている印象を評者は得た。評者の専門である近代江南地域社会史との関連でいうと、江南は沿岸市場の要に位置するが、地域エリートたちはどのような生活空間に生き、彼らの国家意識・地域意識はこうした市場空間とどのように結びついていたのか、考えさせられた。

著者はすでに一九八〇年代初頭にこうした視点を提起し、従来の「半植民地」論、生産重視の観点から捨象されてきた叙述を丹念に拾い集め、また統計資料の分析を積み重ね、各アクターの主体的努力・利潤追求と客観的情勢の相互作用の過程を描き出したのである。序論が大幅に書き直してあるとはいえ、その視点自体はほぼ一貫している。残念ながら、本書が旧稿をまとめたものであるため、すでに旧稿を読んだ読者にとって、新鮮さにやや欠ける点である。また、たとえば日清戦争以降のシステム解体の過程は詳細に論じられているわけではなく、またそれは完全な解体なのか、解体後である二十世紀前半はどうとらえられるのか必ずしも明確ではないなど課題も残っている。これを経過点として、著者の研究の新たな展開を期待してやまない。

最後に付篇に関わる個人的な思い出について述べたい。付篇の旧稿は一九八八年、著者の留学中に書かれたものであるが、ここに描かれた上海体験は評者も共有している。そもそも評者は八七年に留学のため乗った上海行きの船のデッキで、同じく留学に向かう著者と偶然再会し、それで

▶ トップページにもどる

留学期間中、お互いの留学先を訪問することがあった。評者が上海の華東師範大学に著者を訪ねて行ったのは、八八年春、上海でA型肝炎が大流行していたときで、大学内にも隔離病棟が設置されていた。またそのころ、上海郊外で大きな列車事故があり、日本の修学旅行生にも多数犠牲者が出たため、華東師範の日本人留学生が通訳として動員された。著者はその一人として現場に行っており、当時の緊迫した状況について評者に語ってくれた。『上海史』（東方書店、一九九五年）でも少し触れたが、肝炎の流行も鉄道事故も、改革開放政策により中国の人や物の移動が急に活発になったため生じた現象である。いわば新たな流通の時代の黎明期に起きた悲劇であった。八八年は物価も急騰し、「価格改革」が提唱されたがうまくいかず、こうした状況の上に、翌年、大規模な民主運動が起きるのである。これら一連の体験が、著者の研究にどう反映されているか伺いたいところである。